

アメリカ教育行政学における エバース・ラコムスキの整合主義的認識論

大津尚志

Coherentists' approach to educational administration in America

Takashi OTSU

Much of the devate over educational administrative theory has been made by philosophical considerations. From the rise of Theory Movement in early 1950's, logical empiricism dominated the scene in educational administration for long. But many critics argue that logical empiricists theory of knowledge is too narrow to be usefully applied to any systematic account of educational administration. C.Evers and G.Lakomski think educational administration is best served by a post-positivist theory of science that is broad enough to incorporate considerations of ethics and human subejctivity. Such a theory should be justified by a coherentist epistemology which they see as a major alternative to the foundational epistemological assumptions shared by positivism.

目次

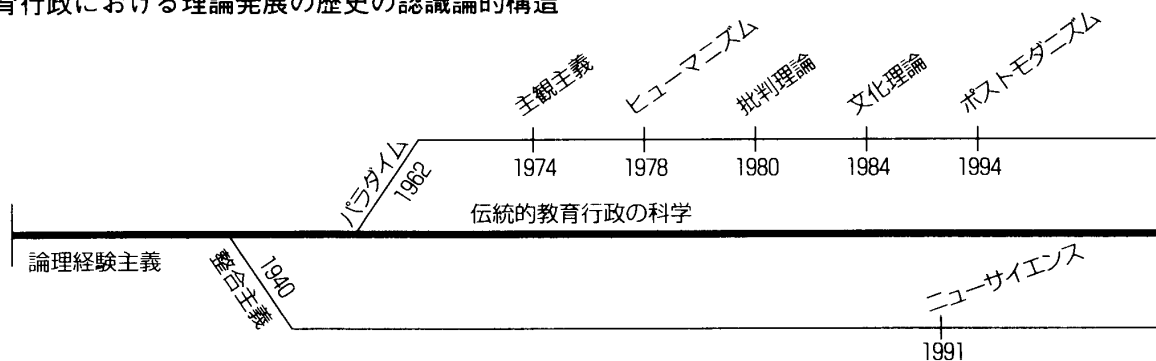
- I. 教育行政理論の認識論的正当化
- II. エバース・ラコムスキの整合主義的認識論
- III. 認識論的統一性（試金石）と反パラダイム
- IV. 整合主義的認識論と倫理の理論

I. 教育行政理論の認識論的正当化

1950年代初めごろからの理論運動の出現以来、教育理論にとって一般哲学と知識に関する理論、特に認識論が重要な役割を果たしてきた、とエバース・ラコムスキは強調する。認識論が満足いく正当化（justification）と考えるものが行政理論の内容と構造に強力な拘束を課し、個別の認識論によって特定される正当化の構造が行政の理論化全体の枠組みを決定する、と彼らは主張する¹⁾。すなわち、第一に、論理実証主義、経験主義の理論と証拠に対する考え方は、理論運動の大きな原動力と

なったし、現在でもアメリカ教育行政理論に大きな地位を占めている。第二に、クーンやファイヤーベントのパラダイム転換理論は実証主義への批判として公式化されたが、相対主義や主観主義の多様な理論を促進するものとして機能した。そして第三に、ポスト実証主義の哲学者クワインのホーリズム（全体論）から示唆を受けた整合主義的認識論である。そして最新の動きとして「認識論に関してすっかり放棄してしまうローティの忠告に従って、ポストモダニズムは科学を単なる別の話に縮小する²⁾」とエバース・ラコムスキは説明している。こうした関係をエバース・ラコムスキは次のように図示している。

図 教育行政における理論発展の歴史の認識論的構造³⁾



本稿では、エバース・ラコムスキの整合主義的認識論による、理論の正当化の問題に焦点を当て、それが主張するものと、その教育行政学における理論選択や理論構築に関する考え方について考察したい。

II. エバース・ラコムスキの整合主義的認識論

エバース・ラコムスキは教育行政学の主流を支配してきた伝統的な科学の概念は主に、①検証状況の複雑さ、②観察事項の理論負荷性のために、誤っていると考える。しかし彼らはその批判は科学自体に向けられる、というよりも誤った科学に対する考え方を攻撃するものである、と考えている。すなわち知識を正当化する特権ある証拠として機能するのは観察報告を伴う経験主義的妥当性にある、とする狭義な実証主義の科学の考え方に反対するのである。事実と価値を分けて考え、教育行政研究から価値問題を排斥することに反対して展開された代替的パラダイムの立場ともこの点では意見を同じくするものである。しかし代替的アプローチは科学を軽視したり、排除するために今や利用できる最も多産的な源から自身を切り離してしまう⁴⁾、と彼らは論じる。クワインは「経験主義の二つのドグマ⁵⁾」を捨て去ることの帰結として「思弁的形而上学と自然科学との間にある境界がぼやけたこと」および「プラグマティズムへの転換」を挙げているが、前者の帰結が、その境界の設定と形而上学の排除こそを表看板にかかげた論理実証主義の痛烈な批判となったことは明らかである⁶⁾、という。そしてこうした考え方こそが、エバース・ラコムスキの整合主義的認識論の重要な下敷きになっていることも明らかであろう。「一般的な整合主義の一つの結論は、観察と理論、事実と価値、ブルートデータとノンブルートデータ、根拠のある知識と派生的知識の間の区別に関して曖昧さが付随するホーリズムへの移行である⁷⁾。」クワインの提供するホーリズムは一つ一つの命題はそれぞれ単独で、つまり他の諸命題とは無関係に経験によって確認されたり反証されたりするのでなく、いくつもの命題が集まりになって初めて確認や反証が可能である、という考えで、「外的世界についてのわれわれの言明は個々に独立でなく、一つの集まりとしてのみ経験の審判を受けるのだ⁸⁾。」という、デュエム・クワインテーゼと呼ばれるものである。その際の理論の修正はときには論理や数学にまで及ぶことがあり、ここでは実証主義が掲げる分析的真理と総合的真理の区別は成り立たないということになる。

整合主義の概念に関する、ボンジュールの説明は、次

のようである。「直観的に整合性は信念体系がどのようにならうかとつじつまがあうかという問題である；組織化された固く構築された信念体系を生むようにどのようにうまくその構成要素たる信念がお互いに適合し、お互いに一致するか緊密につながり合っているか、という問題である⁹⁾。」そして整合主義理論が具体的に重要な美点と考えるものは首尾一貫性、包括性、単純性、保守性、多産性、説明の統一性などである¹⁰⁾。チャーチランドは、単純性、整合性、説明力などの理論的美点は、単なるプラグマティックな美点でなく、理論の真実に対する評価と正しく関連する認識的美点であると考え¹¹⁾、そして理論選択に関して「……その選択は相対的な整合性、単純性と説明の統一性のような超経験的根拠でなされなければならない¹²⁾」と述べている。つまり正当化には経験的証拠は合理的選択に決して十分でないために、経験的適切性以上のものすなわち超経験的美点を考慮してなされなければならない、と主張する。それらの美点は競合する代替的認識論によって仮定される理論的美点でもあるために試金石のような役割を果たす、と考える。エバース・ラコムスキは、1950年頃からの理論運動の始まり以来、現代に到るまでの主流的な教育行政学の伝統を、行動科学と同一視するなら、四つの論理経験主義の仮説が明らかになる、という。

- 1 理論は仮説－演繹法の構造をもち、そこでは期待される観察を含むあまり一般的でない主張はより一般的な主張（と定義の文脈）から演繹される。
- 2 理論は経験的検証可能性の何らかの条件を満たすことによって正当化される。もし演繹された状態が実際に観察されれば、理論は確認される。そうでなければ理論は不当だと証明される。理論を正当化することは対抗する理論よりもより多くの確認、より少ない反証を持つことを示す問題である。
- 3 理論のあらゆる理論用語は操作的定義を与えられることができなければならない。すなわち計測の手順を定義することを認めなければならない。
- 4 教育行政の科学的定義は実質的な倫理主張を排除しなければならない¹³⁾。

このような実証主義的仮説に対してエバース・ラコムスキが提出する整合主義的代替選択肢はそれぞれに対応する次の四点である。

- 1 構造に関して、整合主義はホーリズムへの移行を含む。行政の理論は単に幼少の頃から作り上げてきた総合的理論よりなる信念の切れ目のない織物の特定項目の一部にすぎない。この織物には何らかの弱い構造があるが、それは砦の作りの程度によるもの

だ。多分、単一の観察報告からなる周辺部分の言明は、経験に照らして最もやすく修正されるものである。中央にある言明（論理学、数学、物理学の諸分野）はその織物の主要な組織化された特質として機能し、それを修正することによって単純化の利益や全体的理論の整合性に全体的利益があるのでなければ容易に修正には従わない。それゆえ我々にとって行政の科学は、その最も中心的な組織的な主張は論理学、数学、そして自然科学に関する主張であるような信念の整合的な織物の一部なのである。

- 2 正当化は認識論的に進歩する学習と解釈される。この誤りを含んだ織物は、進行中の社会実践ではあるが、理論負荷の経験にそぐうかそぐわない理論的に動機づけられた期待を生み出す。その織物の修正もしくは行政理論のような織物の一部の修正は、より大きな総合的な整合性に導くならば正当化される。
- 3 理論用語はそれらの意味の多く（全部ではないが）を何らかの特定の観察手順に近いことから得るのでなく、それらの用語が理論の概念的機構の中で果たす役割という点によって得ている。操作的定義と見えるものは、より気楽に、すでに存在する先行的な意味に従って適切さや多分経験的的確さの理由で選ばれた計測手順であると考えられる。
- 4 経験の価値負荷性は観察の理論負荷性と一致するものである。価値は学習されそれゆえ経験に照らして整合的な調節という同じ仮定を通して他の残りの世界に関する理論とともに正当化される。価値の観察との明らかな隔たりは、事実と価値の何らかの方法論的相違の反映というよりも（信念の）織物のより中央に価値を仮定する理論性の反映である。その理由のために、我々は価値は教育行政理論のなかに埋め込まれているということに異論があるとは思わない¹⁴¹。

さらに関連してクワインがエバース・ラコムスキらの認識に関する考え方に影響を与えたのは、心理学や生物学といった自然科学の知見を利用して証拠と理論との関係を理解しようとする「自然化された認識論」である。しかしこの中で科学はもはや特権的な認識論的根拠として機能するのではない。「われわれは何事を語るにも、我々の『信念体系』の中からはか語るができない¹⁵⁾」、そして「認識論でしばしば使われる『証拠』『理論』『信念』『意味』『経験』『人間』といったことばは日常なことばである。……そこで認識論を『理解』可能な仕方では語るためには、……日常なことばや科学的なことばの『理解』を支える、日常的な信念体系や科学的な理論

体系（の大部分）を前提して語ることに、他ならないのである¹⁶⁾。」哲学者と科学者は同じ船に乗りながら「宇宙の彼方からではなく、『航海しながら船を修繕する』ごとく、概念枠（理論）の内側から不断に手直しをし、真理への漸近をはからざるを得ないことを主張する¹⁷⁾。」とも説明される。エバース・ラコムスキは自然科学を最も強力な理論体系であるとみなすゆえに、科学との矛盾を避けることは理論にとって重要な拘束となるが、それは科学から主張を得る試みよりも、もしくは科学理論と実践の間の誤ったモデルを映し出す試みよりも、ずっと弱くてより合理的な要求であると論じる¹⁸⁾。そして、「……我々は認識論や方法論は、心や脳の機能の経験的理解、学習と認識の理論のようなものに関して共約不能な性質を持っているかどうか観察すべきである。認識論自体は、それゆえ経験科学につながりそれを頼りにする。クワインの言葉で認識は自然化される¹⁹⁾。」と主張する。

実際にどのような理論が整合主義的基準を満たすのかに関して一般的に理論の一貫性、より包括的な理論、より多くの現象を説明できる理論、矛盾や反証例のより少ない理論、最大範囲の現象を説明する最小量の説明機構という意味で単純な理論、理論自体の説明源を越えない理論、それ自体の専門用語で証拠がないという区別を仮定しない理論、そして特に認識論で適用される次の二つの要求を満足させるという意味で学習可能であるような行政理論すなわち第一にそれらが人間の学習に関する我々の最上の自然主義的説明の幅広い要求と整合すること、そして第二にそれらが我々の全体的総合的世界観における別の部門のより信頼できる知識体系と矛盾しないこと、を挙げている。そしてこうした要求のネットワーク的効果は行政理論に我々が構築できる最も整合的総合的理論の一部であることを要求し、この総合的理論が最も信頼しうる科学知識をも含むような行政の科学に到るとエバース・ラコムスキは考えるのである²⁰⁾。

III. 認識論的統一性（試金石）と反パラダイム

エバース・ラコムスキは伝統的な科学的アプローチ（実証主義）への批判の多くに対しては共感的である一方で、提供された代替選択肢に対しても批判的であった。なぜなら代替的アプローチは科学を軽視したり排除するために今日利用できる最も多産的な源から自身を切り離してしまうと考えるからである²¹⁾。彼らは科学に対する代替選択肢は必要がないと考える。ただよりよい科学を必要とし科学に対する批判によってなされる正統な根拠

に調和するように科学は拡大される必要がある、と考える²²⁾。伝統的な行政の科学はその根拠から倫理主張と主観的経験の範囲を省くのに対して代替的アプローチは他の根拠を用いることをしばしば求めた。そして「異なる研究方法は異なる認識論において認可されると信じられており、かくしてそれぞれの技術の異なる『勢力範囲』をきちんと切り開くゆえに、認識論的関心はしばしば方法論的関心と混同されるか、解決済みであると思われるかのどちらかである²³⁾。」と論じる。

エバース・ラコムスキによるとパラダイムには異なる三つの考え方があると言ひ、第一は同じ基準では測れない共約不能 (incommensurable) の多様なパラダイムが存在するという考え方である。このことはどんな研究も、パラダイム間に立って判断する合理的方法を提供できない、ということの意味する。同じ研究領域内でのお互いに矛盾し競いあう研究方法である (相反する多様性テーゼ、oppositional diversity thesis²⁴⁾)。第二は共約不能性にもかかわらず相補的な、認識論的に異なるパラダイムがあるという考え方である (相補的多様性テーゼ、complementary diversity thesis²⁵⁾)。第三は先の二つが明らかに異なるパラダイムを認めているのに対し、認識論的多様性を否定する考え方である (統一性テーゼ、unity thesis²⁶⁾)。エバース・ラコムスキはこの立場をとっている。この考え方は異なる研究方法が共約不能のパラダイムの下でまとめられるという考えに同意せず、そしてそのようなパラダイムの考え方こそが誤りであり、不整合であると主張する²⁷⁾。エバースは研究と方法に関するパラダイムの解釈は誤っており、パラダイムの議論は「それ自体で見込みのある方法論というよりも、狭い経験主義に対する背離法である²⁸⁾」と考える。統一性テーゼは、それぞれの研究方法の利点を判断するための正当化、意味、真理に関するある共有された概念や基準すなわち「試金石」が存在し、それでそれらはお互いに生産的な関係に持ち込まれることができると主張するものである。そして実際の問題から得られる教育行政研究の認識論的統一を主張する²⁹⁾。一貫性のなさ、ライバルと比べて説明力の欠如、その場限りの仮説の使用などといった理論的欠点に印象を受けるかぎり、我々はこの基準に認識論と研究方法の評価における試金石として機能することを許していると考えている。

研究伝統の形成とパラダイム論争に及ぼす実証主義の影響に気が付いて、リンカーンとギューバはまた別の3方向の区分を述べ、パラダイムを直接パラダイムとして名付けるのではなく、むしろパラダイムの時代—ある基本的信念がまったく違ったふうに研究を導いた時代—と

名付けた。彼らはこれらのパラダイム時代を前実証主義—実証主義—脱実証主義 (prepositivist-positivist-post-positivist) としている³⁰⁾。

パラダイムは実際の理論と、これらの理論の標準と基準もしくはパラダイム独自の認識論の両方を含んでおり、異なるパラダイムが評価されることができるとの特権的な認識論的に有利な点は存在せず、各々のパラダイムに組み込まれた対抗的な認識論的基準があるだけである³¹⁾。それに対して整合主義的認識論の基準はすべてのいわゆる異なるパラダイムが知識主張を正当化する時に用いることができる。エバース・ラコムスキは主張する³²⁾。「すべての教育研究者に共有される一つの現実の問題は、どのように人間の学習自体への研究を最善に行なうかということである。この問題なしに教育研究は認識論的に多様であるかどうかに関する論争もありえない。なぜなら、いやしくも問題があるということは『真理』、『意味』、『適切性』、『解釈』、『パラダイム』などのような一般的な認識論的専門用語を含む言語の共有を少なくとも前提とするからである。競争はもちろん残るが、それは教育研究の方法を含む理論内での競争であって、パラダイム間の競争ではない。競争は試金石に加えて、共有されない—共約不能という意味ではなく—概念、仮説、方法規則があるためである。実際これこそが競争の状況の中で一つの理論と他とを区別することができる重要部分である。しかしながらそれらが争うべき問題を持ち、ある共有の問題を持つときにのみ理論間の本当の争いは起こる。……共通の問題を明らかにすることから始めて、我々はさらなる試金石を明らかにすることにすすみ、そして理論が競いあう試金石の枠組みを苦心して作り上げる³³⁾。」また整合的認識論自体もまた他の競合する理論と同様で試金石のテストに従うということが強調される。このようにエバース・ラコムスキはパラダイムという考え方を退け、統一的な認識論の正当化の試金石という概念を提供する。

IV. 整合主義的認識論と倫理の理論

いくつかの教育行政学へのアプローチにおいて倫理的知識への考え方が行政理論の性質や科学との関係に徹底的な重要性を持っていた。ベイツ、ホジキンソン、グリーンフィールドのような理論家は行政は理論と実践のあらゆる段階で価値問題を含んでいることに注目して³⁴⁾、伝統的実証主義的科学観を退けるが、どのように競いあう価値主張を判定するかという問題に直面することになる。ホジキンソンは「価値命題は論理命題や経験的に証明で

きる命題と同様に真、あるいは偽とみなすことはできない³⁵⁾。」と述べている。すなわち彼の主張を手短かにまとめると、真、偽は事実言明にのみあてはまるのだが、事実と価値の間には架橋できないギャップがあるので、真、偽という概念は価値にあてはめることはできない³⁶⁾、ということである。これはホジキンソンらが倫理の自立性、すなわち倫理用語は自然主義的に定義することは自然主義的誤謬を犯すことになるというムーアの主張や、倫理的な主張は事実的前提から得られない、というヒュームの is/ought 二分法を暗黙のうちにも支持しているためと考えられる³⁷⁾。エバース・ラコムスキはこうした倫理の自立性に対する伝統的議論を誤りであるとしている³⁸⁾。この議論の是非を論じることは筆者には容易ではないが、このことは少なくとも脱実証主義の科学に対する考え方において分析的言明と総合的言明の区別が不明瞭になったことを反映しているということは言えるであろう。エバース・ラコムスキは、倫理用語を人間の幸福、知識の進歩、人間の繁栄のような何らかの自然の性質で定義することは可能であると考えており、それで逆に倫理的な主張が本質的に非自然であると示されないかぎり彼らの立場が排除され得ないことは明らかだ³⁹⁾。それで「認識論的ホーリズムの必然の結果はもし倫理言明もしくは仮説が、我々の学習された信念の織物の中に見いだされるとすれば、倫理言明をとにかくも意味がないとか経験的内容を欠いているとして隔離できないということである。それら（倫理言明）は我々の他のすべての信念と同様に経験を解釈するという同じ経験的圧迫のもとで得られる。……結局倫理的理論は行政の包括的理論の一部となれるということである。……認識論的複雑さと論争は行政理論の命題から倫理言明を排除する適切な根拠でない⁴⁰⁾。」さらに、「……人間の繁栄や福利の内容や条件のような基本的な問題を扱うために、倫理は経験的証拠とは離れているように見える。しかし我々にとってこれは、総合的理論、我々の信念の織物のより中心により近くあるためである。クワインの有用なメタファーを用いると、もし経験的証拠が周辺皮相でぶつかれば、その証拠は単純性、包括性、一貫性や他の整合性基準によってその織物全体で調停される⁴¹⁾。」と説明されている。エバース・ラコムスキが試みたことは価値と人間の主観性を組み込めるような行政の新しい科学を展開することであった。そのために古い実証主義的科学観を排し、パラダイムと称される多様なアプローチにも適用できるような「試金石」を掘り出そうとした。自然科学の知見は現在利用できる最も確実な知識源であると考えゆえに「自然化された認識論」に基づく整合主義という新しい

科学観を理論の正当化の土台に据えることになり、教育行政の理論は他の諸科学理論とつながって少しでも信頼性があると思われるものを足掛かりにより総合的な理論に向けてより漸進的な発展をめざすことになる。

注

- 1) See, Evers, Colin W., and Lakomski, Gabriele, *Knowing Educational Administration*, (Pergamon Press, 1991, p.2)
- 2) Evers, Colin W., and Lakomski, Gabriele, *Science in Educational Administration: A Postpositivist Conception*, (*Educational Administration Quarterly*, v.32, n.3, 1996, p.379, at 380.)
- 3) *Ibid.*, at 387.
- 4) Evers, Colin W., and Lakomski, Gabriele, *Three Dogmas: A Rejoinder*, (*Journal of Educational Administration*, v.32, n.4, 1994, p.28, at 31.)
- 5) 丹治信春『クワイン ホーリズムの哲学』講談社、1997年、p.88 参照。同書によると、「経験主義の二つのドグマ」とは、1950年の末に、クワインがアメリカ哲学会において発表した論文であり、第一のドグマとは、「分析的な真理、すなわち、事実とは独立に意味に基づく真理と、総合的な真理、すなわち事実に基づく真理との間に、ある根本的な区分がある、という信念」であり、第二のドグマとは、「還元主義、すなわち、有意味な言明はどれも、直接経験を指示する名辞からの、何らかの論理的構成物と等値である、という信念」である。
- 6) 丹治信春、前提書、p.88参照。
- 7) Evers, Colin W., and Lakomski, Gabriele, *Justifying Educational Administration*, (*Educational Management and Administration*, v.21, n.3, 1993, p.140, at 150.)
- 8) 丹治信春、前提書註5)、p.102.
- 9) Bonjour, Laurence, *The Structure of Empirical Knowledge*, (Harvard University Press, 1985, p.93, (cited in Evers and Lakomski, supra note 1, at 37.)
- 10) Evers and Lakomski, supra note 1, at 37.
- 11) Churchland, Paul M., *The Ontological Status of Observables: In Praise of the Superempirical Virtues*, (Churchland, Paul M., and Hooker, Clifford A., (eds.) *Images of Science*, (University of Chicago Press, 1985, p.35, at 41.))
- 12) *Ibid.*, at 41~42.
- 13) Evers and Lakomski, supra note 2, at 383~384.
- 14) *Ibid.*, at 387~388.
- 15) 丹治信春、前提書註5)、p.253. 傍点原文。
- 16) 丹治信春、前提書、p.254.
- 17) 河野和清『現代アメリカ教育行政学の研究』多賀出版、1995年、p.359~360.

- 18) See, Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 70.
- 19) *Ibid.*, at 231.
- 20) *Ibid.*, at 9.
- 21) Evers and Lakomski, *supra* note 4, at 31.
- 22) See, Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 213.
- 23) *Ibid.*, at 214.
- 24) *Ibid.*, at 220.
- 25) *Ibid.*, at 222.
- 26) *Ibid.*, at 231.
- 27) *Ibid.*, at 214~215.
- 28) Evers, Colin W., *Towards a Coherentist Theory of Validity*, (International Journal of Educational Research, v.15, n.6, 1991, p.521.)
- 29) Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 215.
- 30) Lincoln, Y.S., and Guba E.G., *Naturalistic Inquiry*, (Beverly Hills: Sage, 1985,) (cited in Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 218~219.)
- 31) See, Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 225.
- 32) Evers and Lakomski, *supra* note 4, at 32.
- 33) See, Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 232.
- 34) See, Evers, Colin W., *Educational Administration and the New Philosophy of Science*, (The Journal of Educational Administration, v. 26, n.1, 1988, p.3, at 12.)
- 35) Hodgkinson, Christopher, *Towards a Philosophy of Administration*, (Basil Blackwell. 1978, p.62) なお、ホジキンソンについては大津尚志「現代アメリカ教育行政学におけるホジキンソンの『哲学』」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第38巻、1998年刊行予定、も参照)
- 36) Evers, Colin W., *Hodgkinson on Ethics and the Philosophy of Administrations*, (Educational Administration Quarterly, v.21, n.4, 1985. p.27, at 32~33.)
- 37) エバーズはホジキンソンはこの二つを組み合わせる自説を主張していると、指摘している。See, Evers, Colin W., *Hodgkinson on Moral Leadership*, (Educational Management and Administration, v.21, n.4, 1995, p.259, at 260.)
- 38) Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 105, *supra* note 7, at 147. なお、ホジキンソンのエバーズ・ラコムスキに対する反批判については、Hodgkinson, Christopher, *Beyond Pragmatism and Positivism*, (Educational Administration Quarterly, v.22, n.1, 1986, p.5) 及び *The Epistemological Axiology of Evers and Lakomski: Some un-Quineian Quibblings*, (Educational Management and Administration, v.21, n.3, 1993, p.177.) 参照。
- 39) Evers and Lakomski, *supra* note 4, at 35.
- 40) Evers and Lakomski, *supra* note 1, at 58~59.
- 41) Evers and Lakomski, *supra* note 7, at 148.